

子どもたちのきれいなトイレこそ、まちづくりの原点

—— 3都市に見る参加型学校トイレ改修への取り組み ——

高田利男 神奈川県横須賀市教育委員会学校管理課長
板野正博 岡山県岡山市教育委員会施設課主任
細瀨義之 埼玉県戸田市役所都市整備部都市計画課主幹
司会 / 高嶋弘明 学校のトイレ研究会事務局長



現在、全国の学校でトイレ改修が進んでいます。その一方でいじめの温床や器物損壊といった学校トイレをとりまく問題も未だ解決されていません。

毎日使うトイレは子どもも大人も対等に自分の意見を言うことができ、コミュニケーションの仲立ちとして絶好の材料です。参加型学校トイレづくりは児童・生徒・教員・保護者の信頼関係の醸成はもちろん、教育環境整備を通じた学校再生の切り札となり、ひいては災害時避難所の役割も担う地域中核施設としての環境をレベルアップする面でまちづくりにも貢献していくのではないのでしょうか。

建築・都市開発畑というバックグラウンドを生かして参加型学校トイレづくりに挑んだ3都市の行政マンに、その活動経緯や取り組みのポイントと成果、さらには後続へのアドバイスや提言まで熱く語っていただきました。

参加型の原点は「子どものためにみんなで」

——参加型学校トイレづくりに取り組まれることとなったきっかけやそのいきさつは？

高田 学校トイレの3Kが話題になっていた1998年頃、横須賀市教育委員会から、当時所属していた営繕課に市内の全学校のトイレを改修してほしいと依頼がきたのです。

一部の荒れた中学校では扉が壊されブース自体がないような時期でした。それで「なんとか壊されないようにしたいものだね」と話し合ったことが、参加型学校トイレに取り組むスタート地点だった気がします。

チームで作戦会議を開き、子どもたちとコラボレーションして一緒につくっていけば、子どもたちは「自分たちのトイレなんだ」とかわいがり、大切にもらえるだろうと考えました。そのためにはまず児童との接触のきっかけをつくろうと、先生にお願いして児童へのアンケートと、それをもとにした会議の機会を設けたのが始まりです。

板野 子どもたちが参画できるトイレづくりについて議

会質問があったり、生徒たちとのタウンミーティングの中でトイレ改修の要望の声が高かったことや、工事監査において改修したばかりのトイレが壊され、新しくきれいなトイレというだけでは、みんなが大切に使うのではないと感じたことが、みんなのすこやかトイレに取り組むきっかけでした。

取り組みのスタンスとしては、自分たちで調査して、コンセンサスを得るために話し合いを持つなど、みんなが主人公になって楽しく取り組めて、つくったことを誇りに思える、地域共有の財産となるような事業展開に心がけました。

細瀨 戸田市では2000年頃から建築課と教育委員会が連携しての学校トイレの全校改修が始まっていました。私は2003年に教育委員会総務課に異動になりましたが、それまでは都市計画課で「パートナーシップでつくる人・水・緑輝くまちとだ」をテーマに市民と一緒にまちづくりに取り組んでいました。教育の場でのパートナーは誰だろう、児童・生徒、学校、あるいはPTAと考えたとき、ワークショップ（WS）をやって直接子どもたちの意見を聞いてみたいと上司に提案しました。建築課ともども、時間と人的な面から設計事務所をパートナーに加え、ともかくやってみようという思いでした。

それに加え、WSでのトイレの設計を通して、自分たちが考えたものが1年後に具現化し、こんな形になったんだという「ものづくりの喜び」を子どもたちに知ってもらいたいという気持ちも非常に強くありましたね。

興味と楽しさが子どもたちを本気にさせる

——まず子どもたちのため、というのが、どの自治体も最初にあるのですね。具体的な活動の手法やプロセスについてお聞かせいただけますか。

高田 ちょっと俗っぽい言い方ですが、会議の場で子どもたちと「取引」をしたのです。トイレをきれいにして、しかもベンチが欲しければベンチ、サッカーのポスター

が貼りたかったら掲示板を、校則が許す範囲で先生を口説いてつくってあげるよ、ただし君たちがトイレを大切に使うルールをつくってくればね……と。これで子どもたちは盛り上がり、影からの先生の誘導にも助けられて、見事に取引が成立しました。

でもこれだけでは足りません。「自分たちがつくった自分たちのトイレなんだ」という熱いものを引き出すには、参加した証しになる「品物」をつくってやらねばならない。そこで担当職員と子どもたちとで仕上げの色調やピクトサインを決めていきました。サインは子どもたちの描いた原画を工場に持ち込んでそのまま製品にしています。さらに使用者がいない年度には倉庫となっていた障害者専用トイレをやめ、一般トイレの中に大きなブースをつくり子どもたちが名前をつける、ということもしました。「誰でも使えるみんなのトイレなんだ」と高らかに謳って。

板野 子どもたちがイメージを描く前に、現状のトイレの問題点やどのような方向性でトイレ整備を進めていくのかなど、体の仕組みや健康に関することなどの基礎的なことから、便器数の割合や平面計画などの専門的な内容にいたるまで、フェーズを追ってわかりやすく教えていくことに心がけています。

最初の頃は、あれもこれも大切なことを教えていかななくてはならないという思いから、1回の説明の中身が重くなりすぎたのかなという反省がありました。回数を重ねるごとに子どもたちの目が輝き、退屈にならないように体を動かしたり、考えたりできる説明へと工夫を重ねていきました。

みんなが活動できるテーマを設けてフィールドワークを良くしていくことが必要なことです。さらに地域の共有財産ということを考えて、地域アイデンティティという言葉がキーワードではないでしょうか。地域アイデンティティといっても最初のうちはピンとこないのが大半で、地域や学校の特徴の中では、田舎であるとか、ガラが悪いといった声も聞かれました。地域の風物、自然、匂いなど、小さなことから糸口を見つけて、大きな輪に広げていくことが地域のアイデンティティとして共有できるのではないかと思います。トイレの壁の色、タイルのデザイン、ピクトサインひとつとっても、その制作過程の中には、先生や地域の人とのコミュニケーションをした上で、地域資源の要素が盛り込まれているんです。

もうひとつ重要なことは、人のために何かしたと思えるような事業展開に心がけるということです。

健常者、障害者、老若男女にいたるまで、ユニバーサルな気持ちで考えることができる心を根底とした事業の展開は、児童・生徒たちにとって経験したことのない充足感があると思いますし、これが持続性にもつながるの

ではないかと考えます。また、先生や周囲の方々も、子どもたちの可能性を信じると同時に、褒めることも忘れてはいけないと思います。

細淵 WSは子どもたちや先生から学校事務の方まで、トイレを利用しているすべての人にアンケートをとることから始めます。次にその結果発表とWSの概要説明ですが、興味を持ってもらうためににしる面白く、世界のトイレとかジブリの森などいろいろ紹介しています。

子どもたちが真剣になって作業を始めるのはトイレの図面ですね。室内は空欄にして、理想のトイレをフリーハンドで描いたり、便器図などを切り貼りしながらトイレに対する考えをまとめ、その後グループごとに話し合っただけのレイアウトを発表し、最終案を決めていきます。

このWSの中で子どもたちには、学習科目としてでは飽きてしまいがちな環境問題やバリアフリー、節電節水等について自然に問題意識を向上してもらったと感じます。うれしかったのは、何も指示していないのに子どもたちが下級生に対して「どんなトイレがいい？」とインタビューしていたこと。後輩たちにいいものを残したいという気持ちを持ってくれたことと、児童全員が参加したトイレづくりになったことがよかったですね。

板野 既設トイレの改修だと、専用階にするのか同一階で男女を分けるのか、だいたいパターンが決まってきましたが、その辺のご苦労は？

細淵 最初にWSをした小学校のトイレは非常に狭くて古く、男女を区分けする壁がパーティションでした。この狭い空間で子どもたちがいいアイデアを出すのは無理なんです。専用階にすれば面積が広がり、設計の自由度が高まって面白いプランができると思いましたが、せっかく子どもたち主体のWSですから、こちらの意向で決定していいのだろうか、すごく悩ましいところがありました。幸い子どもたちのアイデアの中で「2階と3階別々で広いトイレもいいな」という発想が出て一緒に進んでくれたのがよかったですね。

参画意識とモチベーションが成功につながった

——取組みの成功にはどんな要因があるのでしょうか？

高田 やる前から成果には自信を持っていました。あまりにも汚いトイレだったからです(笑)。多少完璧でなくても生まれ変われば、すごいトイレだと感じていただけるだろうという変な自信がありました。

それとは別に、職員たちにとっては「こんな形でトイレづくりを展開すれば絶対うまくいく。生まれ変わったトイレを見たら子どもたちは喜び、親御さんは度肝を抜かれる、面白い、すごいぞ」というように、楽しく熱が入る仕事だったからだだと思います。よし、やろうじゃないかと、私以上にみんなが熱くなってくれました。



横須賀市立船越小学校のトイレ三様。

横須賀市立鷹取中学校の誰でも使えるトイレ。さまざまなカラーバリエーションをシミュレーションしている。



岡山市立操南中学校のトイレサイン。子どもたちのデザインが採用されている。

これからコラボで何かをつくっていくとすれば、参加したすべての方にやはり熱きものを与え、結果として何かをゲットしていただけるよう配慮すること。ある人は夢、ある人はお金と、みんなそれぞれ違うんですが、それをイメージして全員に与えられるようなマネジメントができたなら、もっと成功するのではと思います。

板野 行政も子どもたちの目線に立って考え、子どもたちや利用する側をサポートするという考えを基礎におくと同時に、WSを重ねるごとにPDCAサイクルの中で、すぐに問題点を洗い出し、改善していくことがスパイラルアップにつながるのではないのでしょうか。また、子どもたちや先生も、限られた時間の中で基礎的なことから技術的・専門的な部分までやらなければならない、いろいろ壁にあたるけれど、それも経験や体験の中で学ぶことで結果として一人ずつが向上したということでしょうか。「参画している」自覚を持つことでみんなが能動的になってくるのがすごく大事だと思っています。

さらにPDCAの中では完成後のフォローアップを忘れない。子どもたちは卒業し、保護者や先生も異動していく中で、やったことや精神が継承されるようシステム化するのが行政側に課せられた大きな課題だと思います。

細淵 子どもたちが楽しさや喜びを感じられる方法でモチベーションを高めたことかなと思います。「みんなで

つくるトイレプロジェクトX」といったキャッチフレーズをつけて一体感を盛り上げたり、サイン計画でも「将来君たちの子どもが小学校に通うときに自慢できるような、そんな気持ちでつくってね」と話したりもしました。

周囲の協力と意識共有がなければ成り立たない

——研究会への問い合わせには、参加型トイレづくりをやりたいけれど、予算的措置が講じられなかったり学校の協力がなかなか得られないといった話が多く見られます。周囲の理解を得て活動を進めていくためのコツといったものがあれば、ぜひ読者に伝えたいのですが。

高田 ちょっと熱くものを語ってそれに応えてくれる、ノリのいい先生をどうやって探すか、探し当てられるかがひとつのコツではないでしょうか。教育委員会からの情報である程度ターゲットを絞り、その先生に熱く語って味方になっていただく。ここで失敗すると、カッコいいことを言ってもまったく進まないことになります。

——横須賀市では11の学校それぞれに担当者をつけ、それによって職員と子どもたちと先生、学校と行政、学校と学校、職員同士のコラボが生まれたと聞きました。

高田 背景も与条件も違うそれぞれの学校を担当するわけですから、当然不公平もある。その中で競争するスタッフは大変だったと思いますが、チームでお互いに知恵を出し合い、競い合ってやりました。

板野 岡山市は子どもを核にして保護者なり先生なり行政なりを動かしていこうという考え方です。とくに行政側・教育委員会の理解と協力は不可欠で、子どもたちの考えや意見が言える環境づくりや基金などの予算的な措置も大事だと思います。また学校側では教職員はもちろん、PTAや学校開放で訪れる地域の方の協力もないと参加型トイレづくりは成功も難しいと思いますね。

——岡山市で特筆したいのは、すこやかトイレ講演会、

PDCAサイクル	
活動等の管理をスムーズに進めるための方法のひとつで、以下の四段階の頭文字をつなげたもの。	か確認する。Act(対処)＝計画に沿っていない部分に対処する。この四段階を順次行い、最後のActを次のPDCAサイクルに引き継ぎ、一周ごとに内容を向上させて、継続的な改善をする。この螺旋状のサイクルをスパイラルアップ(Spiral Up)と呼ぶ。
Plan(計画)＝これまでの実績や将来の予測などをもとにして計画を作成する。Do(実行)＝計画に沿って活動する。Check(確認)＝実際の活動が計画に沿っている	

戸田市立第二小学校(上3点)と新嘗小学校(下2点)のトイレ改修事例。限定されたスペースをさまざまなアイデアで楽しくゆとりのあるトイレにしている。



岡山市立竜之口小学校のトイレサイン。



子どもたちと教育長の座談会など、いろいろな仕掛けづくりをすることで、大人も子どもも広く関心を持ってトイレづくりに取り組んだというところですね。

細淵 学校や市の建築課・財政担当の協力体制、なにより共通認識を持つことが一番大事で、そこさえまできれば次のステップにつながると思います。それができないと、こういう計画自体が成り立ちにくいのではないのでしょうか。

WSを行うときは毎回必ず事前に打ち合わせをするんです。10回やる学校なら打ち合わせも10回ある。平成18年度は2校あったので合わせて40回以上行いました。学校の先生にも多忙の中、多くの時間をつくっていただき、子どもたちのためにやはりいいものをつくっていきましょう、という気持ちを持っていただいたのがよかったと思います。

トイレづくりはまちづくり、人づくり

—お三方とも建築・都市計画分野のご出身で、建築や営繕、都市計画課でまちづくりの仕事をしてこられました。学校トイレづくりも、まちづくりにおける教育の役割の重要性を認識された上での取組みとします。行政や学校の役割、地域の人々の参加を視野に入れてのトイレ改修の可能性についてどのようにお考えですか。

細淵 大きな話かもしれませんが、将来のまちづくりの卵の育成を考えたいですね。自分たちの生活の場である地域について、現地を見たり地域アイデンティティを考えることでいろんな課題が出てくる、それをどう解決していくかといったことを授業科目のひとつとして小学校から勉強してもいいんじゃないか。一週間に一度でもまちづくりの授業をやり、将来は自分のまちに愛着と誇りを持って住み続けたいということになれば素晴らしい。

板野 まちづくりとトイレ整備で考えると、教育の中で

のまちづくりは、やはり人づくりなのかなと思います。

ソフトと関係性を保ちつつ20年30年かけて望ましいまちの姿を考えるのが都市計画ですが、それとは別に、子どもたちが地域に溶け込んでいくために、どういう教育をしてどんなコミュニケーションをとっていくか、身近なところで重要な部分を喚起させることが学校トイレを通してのまちづくりにつながっていくのではと感じます。

高田 学校はまちの中心のひとつだと思います。だれもがふるさとに母校を持っていますから、そういう意味で小中学校はまちづくりの原点。ナントカ施設というと近寄りたがいけれど、学校は年齢にかかわらずどの人にとっても身近な存在です。学校とまちづくりをうまくジョイントさせればもっと面白いまちづくりができてくると思いますね。

細淵 地域の核になる要素は多分にありますね。防犯・安全安心のまちづくりという話もよく出ますが、昼間の授業中の学校は誰でも入りやすい。そうすると老人や緑のボランティアなど、地域の方が学校と密接な関わりを持って地域の目で守るという方法もあります。

オストメイトなど、諸設備が必要な方も増えています。そういう方が困ったとき「小学校に行けば多目的トイレがあるからなんとかなる」ということも考えられる。生かし方はまだまだたくさんあると思うんですね。

ただ、まちづくりは種を植えて育てていくもので、かなり時間がかかります。そういう可能性の中で、学校というのは大きな要素であると考えます。

—お話を伺っていると、商業施設などを中心とする従来の都市計画的考え方とは違う、人を育てる、あるいは地域とのコミュニケーションなど、まちづくり自体が「ソフトな関係づくり」に見えてきます。ハード&アクティブな施設から考えるよりむしろ「住む」というところから考えたまちづくりが問われていくのかもしれないね。

設計の時間感覚を世の中の常識に

——学校トイレづくりで外から設計事務所が入るとき、苦勞するのが工期の問題です。ほとんどは単年度予算で年度内に全部やっってしまうというところがあり、工事は夏休みがメイン。工期の都合で男女別専用トイレにすることができず男女一対の狭いまま改修せざるを得なかった例もあります。行政側の単年度のやり方をゆめれば、そこそこうまく行く気がするのですが。

細瀬 確かにWSなどで子どもたちが参加する場合、7月からの工事でそれまでに設計や業者の指名があると考えれば、子どもたちとのやりとりは早くても5月くらいになり、時間はほとんどありません。前の年に十分設計を行い、次年度に工事を行う方法も有効ですね。

——2年度にまたがると行政側に問題はないのですか。

高田 そうと決めてやればいいですね。例えば研究会から、学校トイレの改修について「1年目に設計、2年目の夏休みにかけてこの程度の工事をするのをお勧めします」といった標準を提示されてみてはいかがですか。しかも一般の方に向けて。専門の人に言ってもダメです。専門以外の人に「この工期は当然だよ」と思わせるセッティングをしないと。

細瀬 「市民の要望」ということですね。

高田 世の中全体の常識が「設計なんて2週間でやっしまえばいい」から「設計だもの、3ヵ月4ヵ月かけて当たり前」になれば誰も無理を言わなくなりますよ。

板野 大事なのはプロセスなんですよ。でも、ある程度フェイズを示してあげないとやはり短絡的な発想で結果を追いかけてしまう。プロセスを大事にするためには時間がかかるということをちゃんと理解できるように、懇切丁寧に説明するのが大事だと思います。

高田 できれば説明をしなくてもわかる日本になっていけばいいなと感じますね（笑）

学校はまちの中核、トイレは原点回帰の場

——最後に、これからの学校施設とトイレに望まれるところがあればお聞かせください。

高田 トイレはたぶん「癒しの場」になっていくのだろ

うと想像しています。住宅であれ学校であれ、トイレや洗面、浴室にゆとりがあり、うまく設計されて癒しの要素があれば、将来的にはすばらしくぜいたくな建物だと思われる。そういう方向に向かって行くとすれば、トイレはまだまだ発展途上だと思います。

板野 地域開放や防災拠点、ノーマライゼーション社会の到来など、学校は教育というカテゴリーだけでなく、福祉やコミュニティや防災といったさまざまな機能的役割が今後拡大していくのではないかと考えています。その中でも、地域とのかかわり合いもいじめもからかひもユニバーサルデザインもバリアフリーも、いろんなことが凝縮しているのがトイレではないでしょうか。

一番汚くなりやすいところを圧倒的な差を持ってきれいにできるのがトイレだし、健やかであり続けるために汗水たらして考えてやったことが後の世代に連綿と流れていくのもトイレです。トイレにたどりつければ「ここでいじめをやっちゃんかなあ」とか「トイレの中で地域の歴史や風土が感じられるなあ」とか、ベンチや掲示板を設ければ「情報発信の拠点になったね」とか、そういったことを喚起できる、原点回帰できる場所がトイレであってほしいと思います。

細瀬 今の日本社会はかなり殺伐としていて、それがいじめや不登校につながる部分があるのではと考えるのですが、そんな中で学校施設にくつろげる空間、ホッとできる、心がリラックスできるトイレなどができれば、子どもたちの安らぎや心の安定につながるのかなと思いますね。

もう一点、学校の体育館は一時避難所に指定されており、地震などの災害時には非常に重要な位置づけがされています。しかし体育館のトイレはなかなか整備が進んでいません。これでは被害にあって憔悴した人々がさらにトイレの心配までしなくてはならない。

本来なら一時避難所的施設のトイレについても、自治体が総合的に改修すべきだと思います。そのためには防災面からのサポートがあれば理想的であると思っています。

——今日は非常に貴重なお話をお聞かせいただき、どうもありがとうございました。



高田利男（たかだ としお）
横須賀市教育委員会学校管理課長
1970年明治大学工学部建築学科卒、同年横須賀市役所入所。建築指導行政、公共建築営繕業務を経て現在に至る。日本初のQBS方式による設計者選定や低コストをはかる横須賀型耐震補強鉄骨プレースの開発等に從事。



板野正博（いたの まさひろ）
岡山市教育委員会施設課主任
1980年岡山市役所入庁。建築指導課、都市計画課、営繕課、都市総務課を経て、2002年から現職に至る。建築指導行政・まちづくり構想／高度情報化都市基本計画・市有施設的设计／監理・公共工事のコスト縮減計画・VE計画策定などに携わる。



細瀬義之（ほそぶち よしゆき）
戸田市都市整備部都市計画課都市創造担当主幹
1979年戸田市役所入庁。建築、開発、都市計画、教育委員会を経て現在に至る。
宅地開発指導要綱、環境空間計画、学校維持保全改修計画策定企画などに從事。